

「心理的瑕疵物件のペット」

—初稿—

2026/01/15

しのめ ののの

〈人物表〉

向田 英二

(27)

賃貸不動産屋の営業

湊 大介

(36)

向田の職場の店長

1.

クロネ「不動産の店舗内（昼）」

賃貸物件を紹介する為の、ありふれた店舗。

向田英二（27）と湊大介（36）、接客カウンタ―で暇そうにだらけきっている。

湊 「……てかさあ」

向田 「はい」

湊 「幽霊って、結局なんなんだろう」

向田 「え？」

湊 「不動産業界的には何にあたるのか、定義する必要があるんじゃないかね？」

向田 「……心理的瑕疵物件、とかじゃなくて？」

湊 「いやさあ」

湊、手元の物件資料に目をやる。

湊 「前の住人が残してた家具とかは、残置物にあたるじゃん？ あとは、物件に最初からついてる設備？ 幽霊って、設備なのかな」

向田 「ええ？」

向田、ニヤツと笑う。

向田 「前の住人が連れてきちゃったとかなら、残置物かもつすねえ。それか……ペットとか？」

湊 「置き去りにされたペット？ かわいそう」

湊、物件資料を向田に見せる。

湊 「確認しに行こっか」

向田 「うーわ最悪。俺苦手なんすよ」

湊 「しょうがないじゃん、問合せ入っちゃったんだから。誰もこの物件の詳細知らないんだもん」

湊 「誰も現地確認してないんすか？」

湊 「うん。大丈夫だって、この時間だしさ。俺も行くから」と、立ち上がる。

向田、仕方なく腰を上げる。

2.

空き家・外観（昼）

うつそうとしたボロい一軒家の前に、車が停まる。

向田が降り、渋い顔で空き家を見上げる。

湊が運転席から声を掛ける。

湊 「車停めてくる。先入ってて」

向田 「入るわけないでしょ。待ってますよ」

湊、笑いながら車で去る。

向田、恐る恐る家の周りを確認する。

家の裏手は小さな丘のようになっており、好き放題に伸びた草木が侵食してきている。

向田 「……幽霊以前に、虫もやばそう」

向田、こわごわ外観の写真を撮ってみる。

すぐにデータを確認するが、異変はない。

向田、息を吐く。慎重に周囲を歩き回り、設備を確認したり、時折写真を撮ったりする。

しばらくして湊がやって来る。

湊 「外観撮れた？」

向田 「はい、一応」

湊 「じゃ、早速行きますか」

向田 「はあ……やだなー」

湊と向田、玄関へ向かう。

3.

空き家・玄関内（昼）

湊と向田、鍵を開けて玄関へ入る。

中は雨戸などが完全に閉め切られており、昼間とは思えないほどの暗闇。

向田 「暗っ」

湊 「ブレーカー、ブレーカー……」

湊、玄関付近のブレーカーを探し当てて上げるも、電気が点かない。

向田 「切れてるじゃないすか。最悪」

二人、スマホのライトを照らす。

湊 「足元気を付けて」

二人、玄関の戸を開けたまま、慎重に中へ進む。

廊下の先にリビングの扉があり、玄関からの光が届きにくい構造になっている。

向田 「いや暗いってえ」

二人、リビングへ入る。

湊、リビングの窓に近づき、雨戸を開ける。
弱い日が差し込んでくる。

向田 「日当たり悪……」

湊 「写真撮ろ、写真」

向田 「嫌ですよ。湊さん撮って」

湊 「ええ？ 外観は撮ってたじゃん」

向田 「それとこれとは別」

向田、室内の写真を撮って向田に見せる。

湊 「ほら、大丈夫じゃん」

向田 「いいってもう」

湊 「俺、水回り見てくる。向田、2階行ける？」

向田 「ええ？ わざわざ分担しなくても良いじゃないすか」

湊 「ビビりすぎだって。なんもないでしょ、この感じ」

向田、ため息を吐いて湊と分かれる。

4.

空き家・2階（昼）

向田、恐る恐る階段を上がって来る。

2階も真っ暗。

向田が雨戸を探そうと踏み出した時、何かが背後を
通ったような物音がする。

向田 「うえっ？」

向田、びくりと振り返る。

向田 「……なに？ 湊さん？」

向田、声を張り上げる。

階下から気の抜けた湊の声。

湊 「どしたー？」

向田 「……なんでもないっす」

向田、気を取り直して雨戸を探す。

覗いた部屋が広めの和室になっており、雨戸が閉め
られている。

向田、近づいてガラス窓を開ける。

続いて雨戸を開けた瞬間、何かが飛び掛かって来る。

向田 「うわあっ」

向田、思わず飛び退く。

よく見ると蛇が足元に落ちている。

向田 「え、蛇？ うわああっ」

蛇が突然機敏に動き、そのまま和室の押し入れへ。少し空いたふすまの隙間から、中へ入っていく。

向田、思わず勢いよく押し入れの戸を閉める。

向田 「……やばあ」

向田、恐る恐る押し入れに近づき、聞き耳を立てる。物音はしない。

向田 「……やばあ」

向田、急ぎ足で部屋を出て階段を下りる。

向田 「湊さん、湊さん」

湊の声 「なんかあった？」

向田 「幽霊って、やっぱりペットだったみたいです。いや、ペットってというか野生なんですけど……」

向田、リビングに入る。

雨戸が閉まっており、真っ暗。

向田 「……え？ 湊さん？ もう雨戸閉めたんすか？」

返事がない。

向田、慌ててキッチンや風呂を覗きに行く。

どこにも湊の姿はない。

向田 「え……？」

向田、突然弾かれたように玄関へ向かう。

玄関の扉が閉まっている。

飛びついて開けようとするも、鍵が掛かっている。

向田 「え？ なんで？」

向田、慌ててガチャガチャと開けようとする。

その時、耳元でおどろおどろしい声が聞こえる。

謎の声 「ペットなんかじゃない」

向田、絶叫。

何とかして玄関の鍵を開け、脱出する。

5.

空き家付近の有料駐車場（昼）

向田が闇雲に走っていると、乗ってきた車を発見。

半狂乱で駆け寄ると、車内で湊が必死にドアを開けようとしている。

湊 「出してくれ、出して」

向田 「は？ 何やってるんですか」

と、声を荒げる。

湊 「開かないんだよ、助けて」

向田 「いや、そういうのやめてくださいよ。わざとでしょ全部」

湊 「何が？ 俺ずっとここにいて、出られなくて……」

と、湊、苦しげに悶絶し始める。

向田 「え？ 湊さん？ 湊さんっ」

向田、必死にドアを開けようとするも開かない。

湊、しばらく苦しみ、泡を吹いて崩れ落ちる。

向田 「うあ、うわああっ。だ、だれかあっ」

向田、その場から逃げるように走り去る。

6.

空き家・外観（昼）

向田の叫び声が響く中、何者かが2階和室の窓の内側から、ひっそりと雨戸を閉める。

おわり